子宮体がん
患者調査レポート

2024年9月

アストラゼネカ株式会社

目次

調査概要	P.3
調査結果サマリー	P.4
本調査結果①医療機関を受診する前	P.6
本調査結果②受診～確定診断～治療	P.13
本調査結果③日常生活への影響と子宮体がんに関する知識	P.21
回答者プロフィール	P.27

調査概要

調査目的	子宮体がん患者さんにおける、受診前から受診～確定診断～治療の様子、日常生活への影響と子宮体がんに関する知識の実態を把握する
調査エリア	全国47都道府県
調査対象者	子宮体がんと診断されたことのある方
回答者数	n=190
調査期間	2024年9月3日（火）～ 2024年9月15日（日）
調査機関	株式会社メディリード
調査主体・監修	アストラゼネカ株式会社／株式会社リサ・サーナ

本調査結果サマリー

調査結果サマリー

医療機関を受診する前

- 子宮体がん診断前に婦人科の受診経験があった患者さんは75%で、そのうち婦人科の定期検診を受けていた方は58%、かかりつけ医がいた方は40代以下では55%、50代では53%、60代以上では50%だった。
- 子宮体がんの検査として用いられる「子宮内膜細胞診」を毎年受けている患者さんは全体の34%であり、婦人科がんの検査の中では毎年受けている割合は最も低かった。
- 「リンチ症候群」は全体の85%の患者さんが名前も認知していなかった。

受診～確定診断～治療

- 子宮体がんと診断される前、医療機関を受診したきっかけは「気になる症状があったから（出血、おりもの、痛み、むくみ等）」（76%）が最も多かった。
- 確定診断を受けるまでに2軒以上医療機関を受診した患者さんは82%おり、32%の患者さんは5軒以上受診したと回答した。
- 異常が見つかったもしくは症状を感じてから、婦人科を受診するまでの期間について、51%の患者さんは1カ月以上かかったと回答した。
- 異常が見つかったもしくは、症状を感じてから婦人科に受診するまでに半月以上の時間がかかった理由としては「不正出血などの症状が子宮体がんと結びつかなかったため受診の必要性を感じなかった」の割合が55%で最も高かった。

日常生活への影響と子宮体がんに関する知識

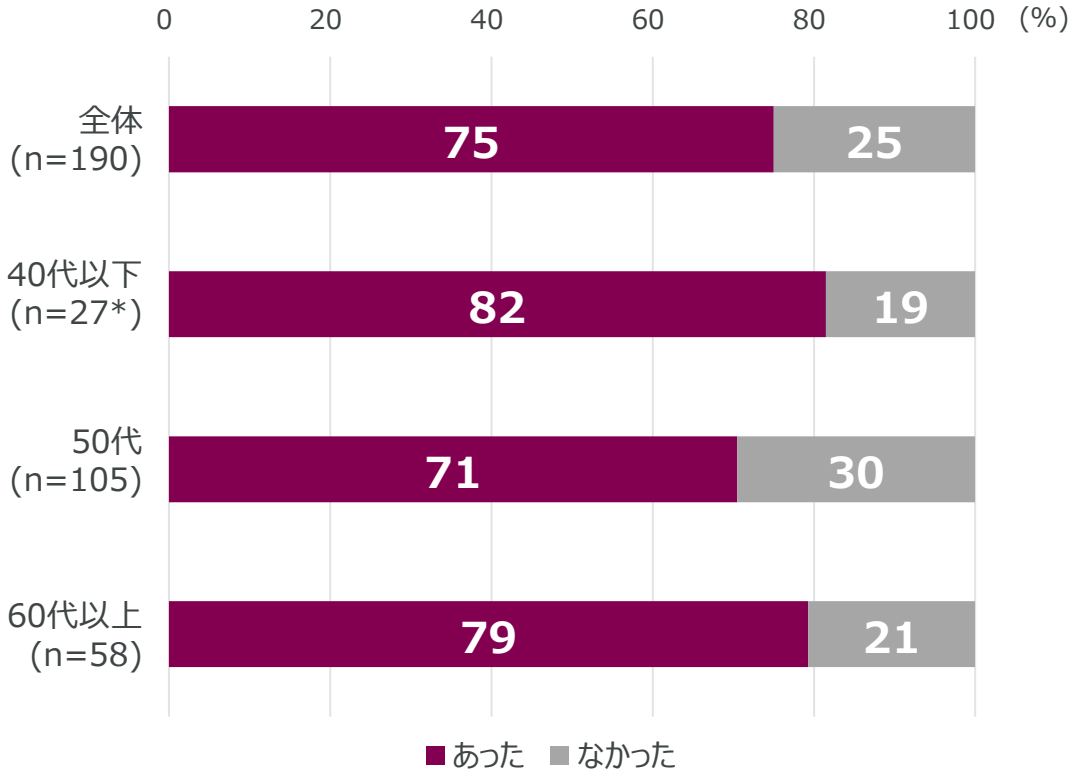
- がんになって生じた日常生活上の変化では「病気のことを真剣に考えるようになった」の割合が30%で最も高かった。
- 診断前に子宮体がんについてどの程度知っていたかを伺ったところ、「全然知らなかった」と回答した方の割合は 、初期症状（67%）、好発年齢（73%）、罹患しやすい人（74%）、発症リスク（75%）だった。
- 診断前に知っていたらよかったと思う知識は「子宮体がんの初期症状」の割合が62%と最も高かった。また、診断前により多くの知識を持っていたとしたら、どんなことにつながると思うかでは、「もっと早い受診につながる」の割合が61%で最も高かった。

本調査結果①
医療機関を受診する前

婦人科の受診経験および定期検診の受診

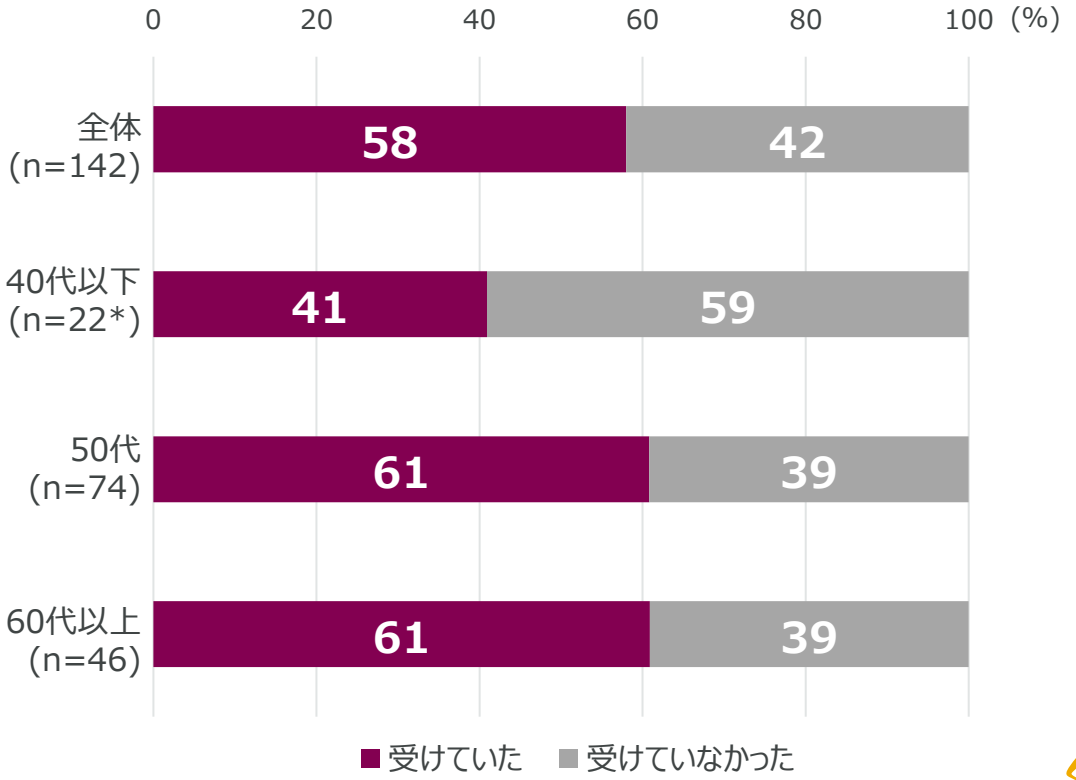
- **子宮体がん診断前に婦人科の受診経験があった患者さんは75%で、そのうち婦人科の定期検診を受けていた方は58%だった。**
- **婦人科の定期検診を受けていた人の割合を年代別にみると、50-60代以上では61%、40代以下においては41%だった。**

Q. がんと診断される前から婦人科の受診経験がありましたか。



Q. がんと診断される前から婦人科の定期検診を受けていましたか。

※婦人科の受診経験があった方のみ回答



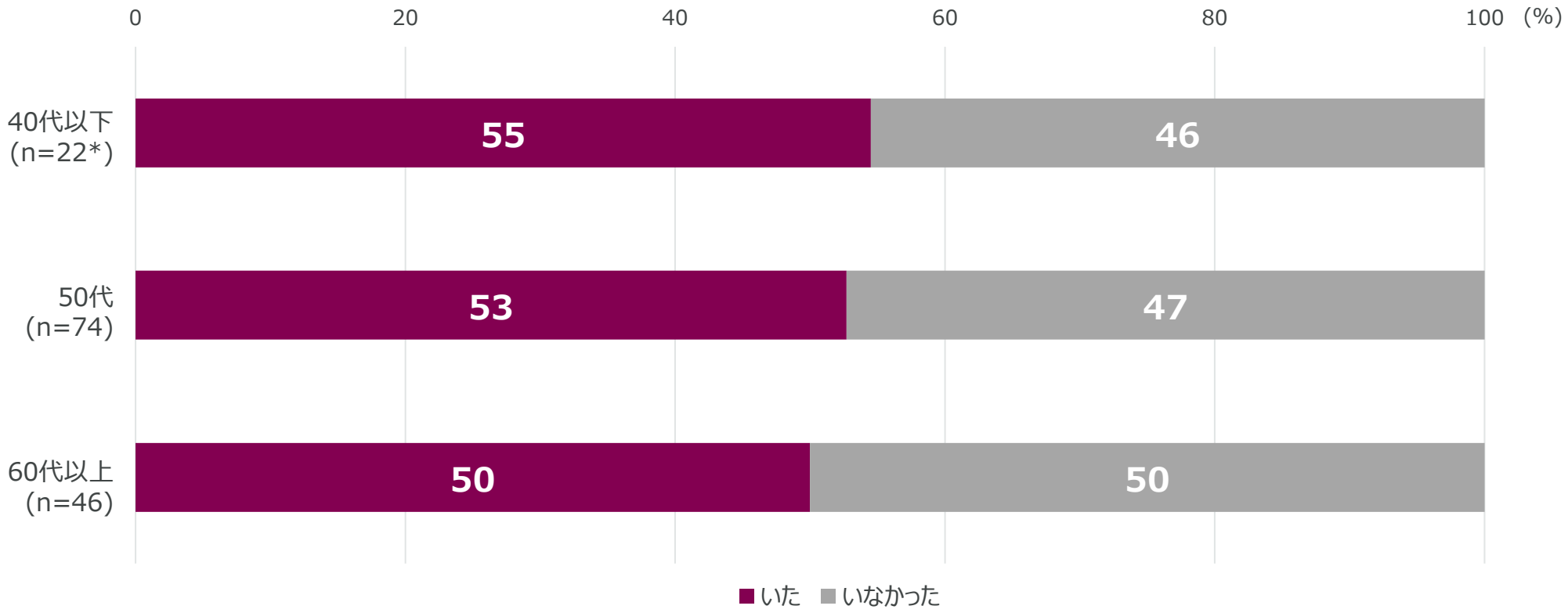
※n<30の箇所(*)は参考値

かかりつけ医の有無（年代別）

- **子宮体がん診断前に婦人科受診経験があると回答した患者さんのうち、かかりつけ医がいたと回答した割合は、40代以下は55%、50代は53%、60代以上は50%だった。**

Q. がんと診断される前から婦人科のかかりつけ医はいましたか。

※婦人科の受診経験があった方のみ回答

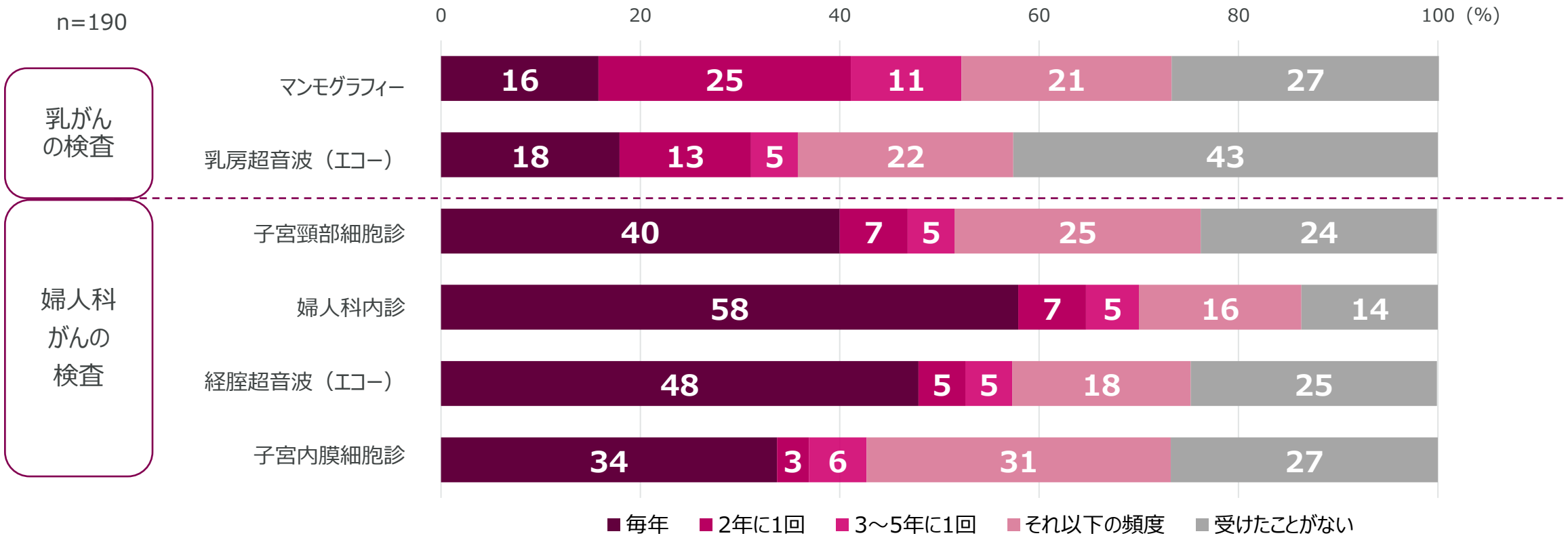


※n<30の箇所(*)は参考値

乳がんの検査・婦人科がんの検査の受診頻度

- 回答した子宮体がん患者さんにおいては、乳がんの検査よりも婦人科がんの検査のほうが毎年受けている割合は高かった。
- 婦人科がんの検査として、毎年受けている検査は「婦人科内診」（58%）が最も多く、次いで「経腟超音波（エコー）」（48%）だった。
- 子宮体がんの検査として行われる子宮内膜細胞診を「毎年」受けている患者さんの割合は34%であり、婦人科がんの検査の中では最も低かった。

Q. それぞれどのぐらいの頻度で検査を受けられますか。

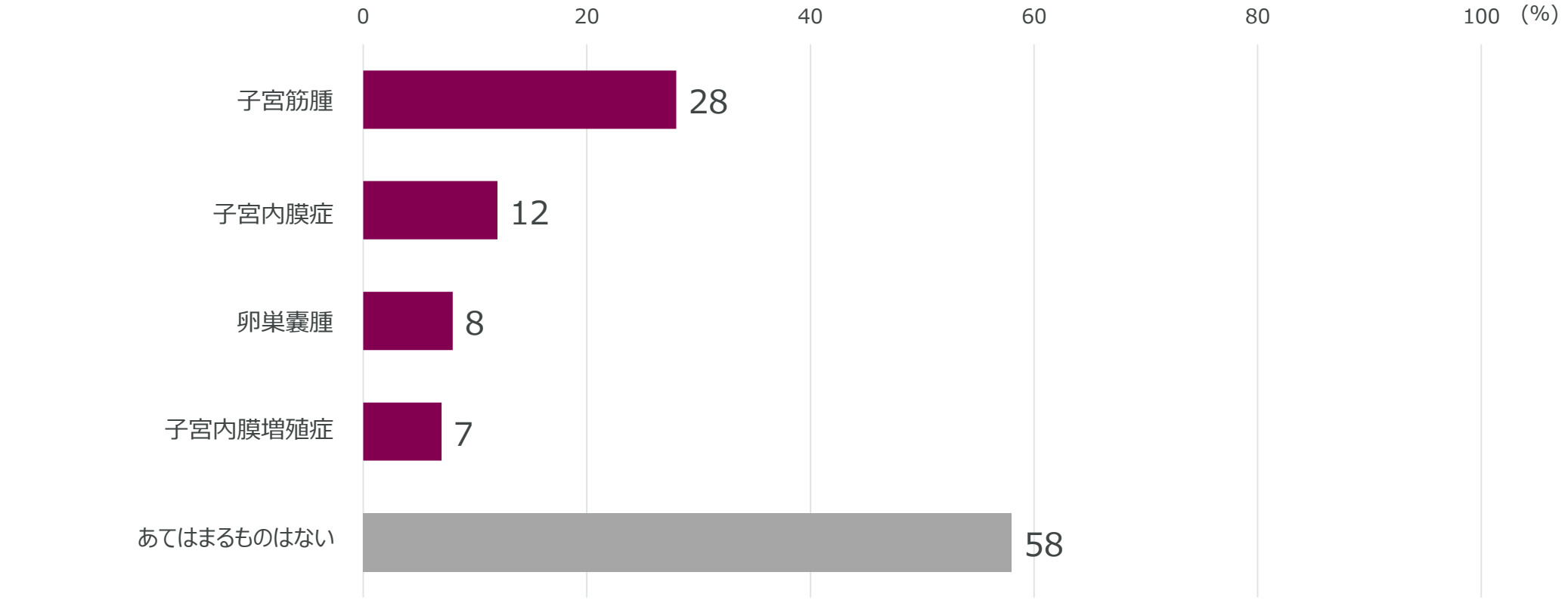


診断前に罹患経験のある婦人科疾患

- **全体の58%が、がんと診断される前に婦人科疾患に罹患した経験はないと回答した。**
- **子宮体がんと診断される前に罹患したことのある婦人科疾患の中で、最も多かったのは「子宮筋腫」（28%）だった。**

Q. がんと診断される前に既往のある婦人科疾患で、当てはまるものはありますか。（複数回答）

n=190



※全体の回答数が多い順に並び替え

リンチ症候群*の認知度

- **リンチ症候群*について、85%の患者さんが「全く知らなかった」と回答した。**

*大腸がん、子宮体がん、卵巣がん、胃がんなどを発生するリスクが高い遺伝性のがん。「DNAミスマッチ修復機能」に関わる遺伝子に生まれつき変化がある場合、がんの発生リスクが高いと報告されています（がん情報サービス　遺伝性腫瘍　https://ganjoho.jp/public/cancer/hereditary_tumors/index.html）

Q. あなたは、リンチ症候群をご存知ですか。

n=190

Q. リンチ症候群関連遺伝子の検査を実施しましたか。

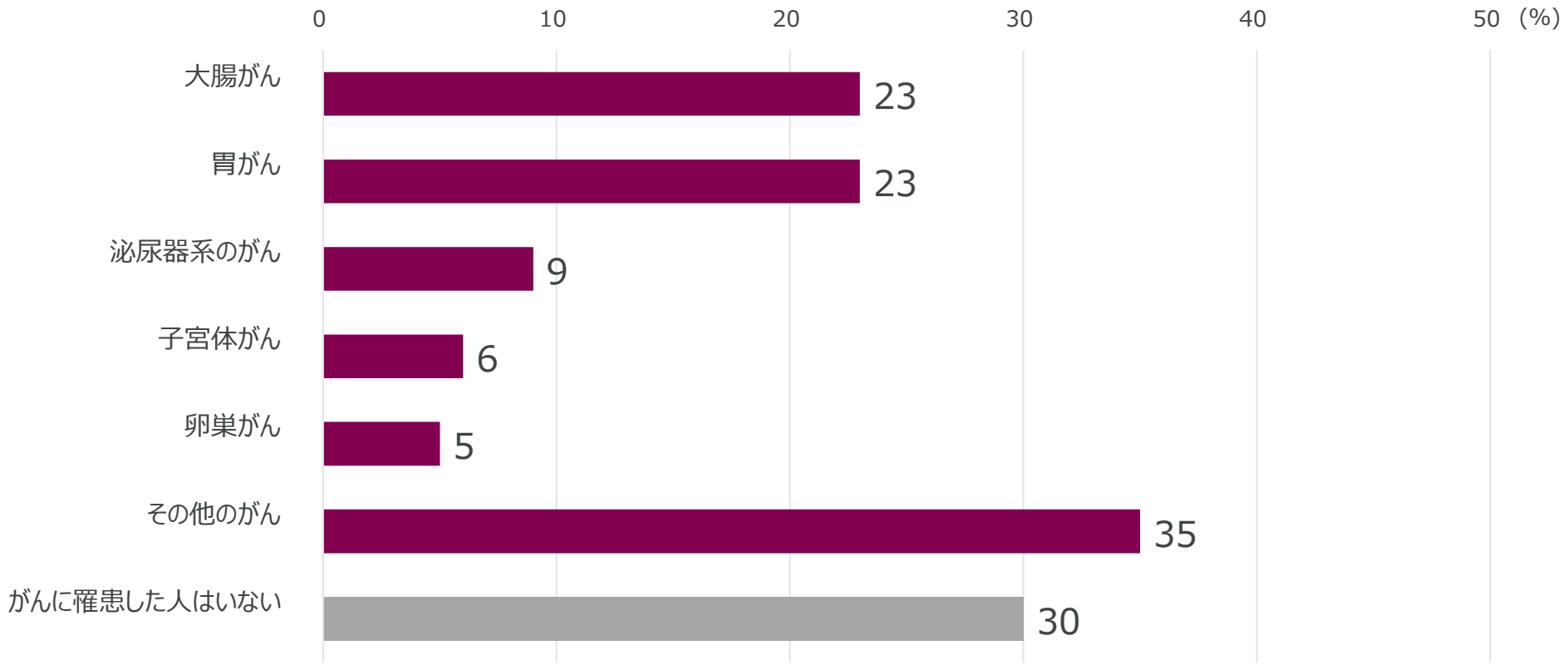
n=190

血縁者のがん罹患

- **回答した子宮体がん患者さんの70%では、血縁者の中にがんに罹患した方がいた。**
- **血縁者が罹患したがん種としては、大腸がんおよび胃がんの割合が23%と最も高かった。**

Q. あなたの血縁者の中に、がんに罹患された方はいらっしゃいますか。（複数回答）

n=190



※全体の回答数が多い順に並び替え

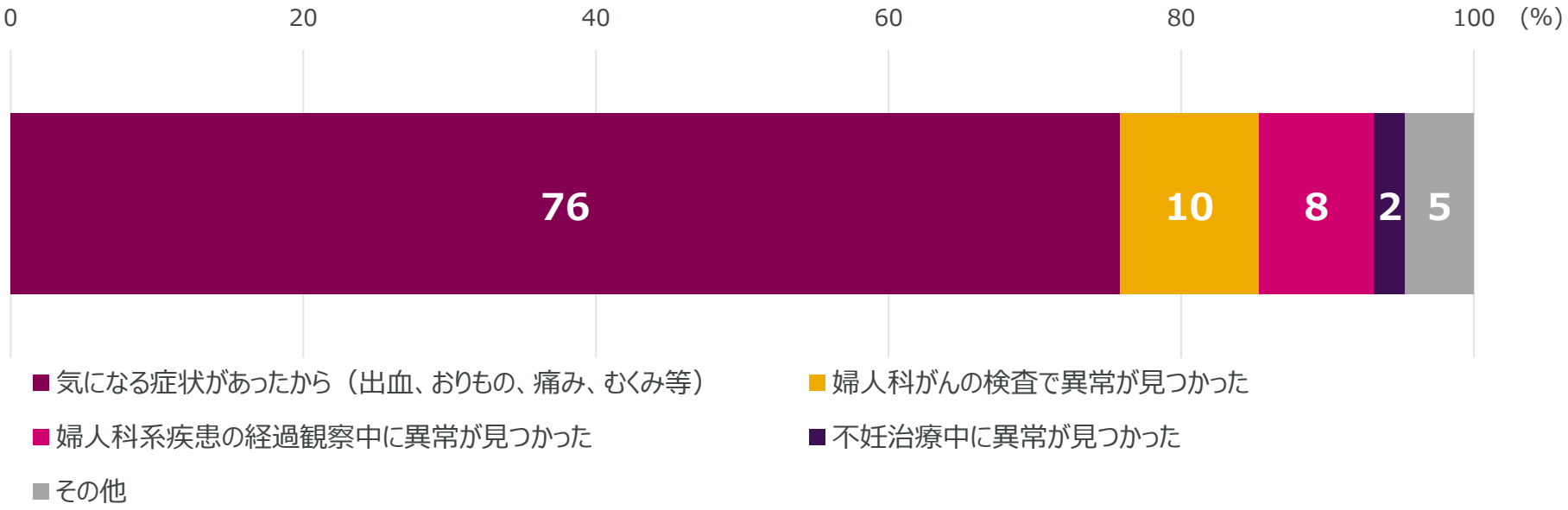
本調査結果②
受診～確定診断～治療

受診のきっかけ

- **子宮体がんと診断される前、医療機関を受診したきっかけは「気になる症状があったから」（76%）が最も多く、次いで「婦人科がんの検査で異常が見つかった」（10%）、「婦人科系疾患の経過観察中に異常が見つかった」（8%）だった。**

n=190

Q. あなたご自身は、子宮体がんと診断される前どのようなことがきっかけで医療機関を受診しましたか。



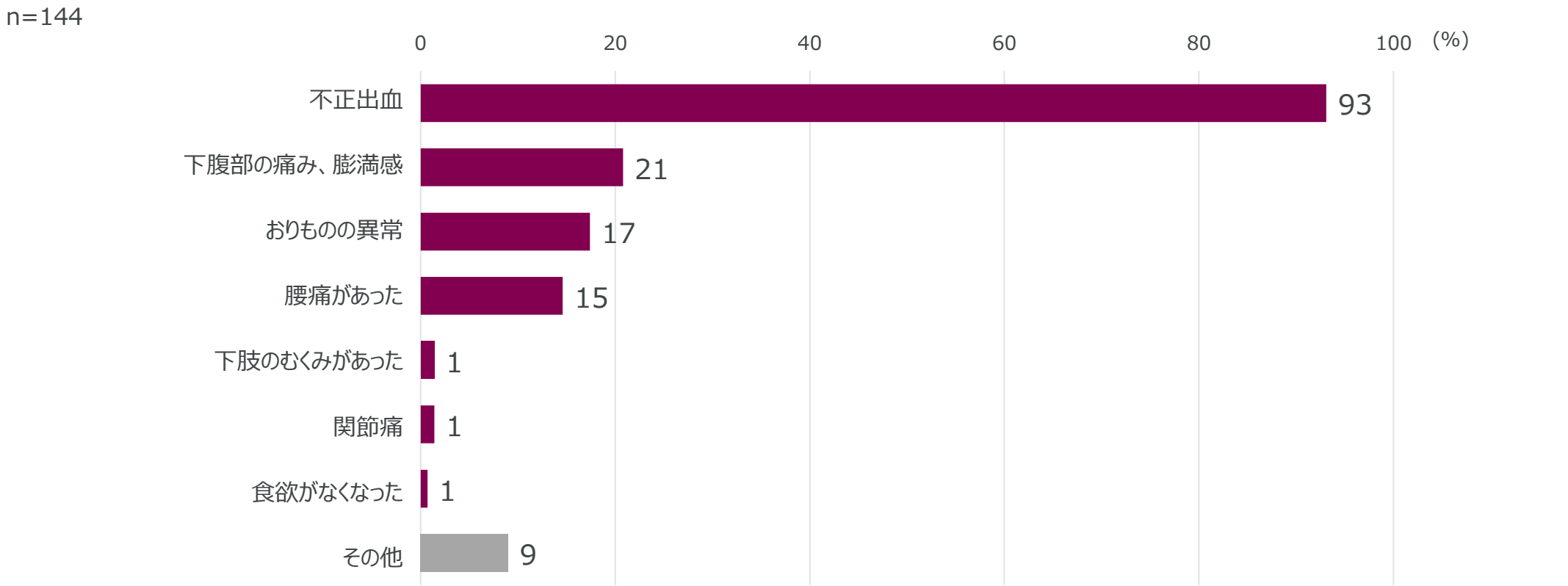
※全体の回答数が多い順に並び替え

受診のきっかけとなった具体的な症状

- **受診のきっかけとなった具体的な症状では、「不正出血」（93%）が最も多かった。**

Q. 具体的にどのような症状がでましたか。当てはまるものを全てお教えください。（複数回答）

※受診のきっかけが「気になる症状があった」方のみ回答



※全体の回答数が多い順に並び替え

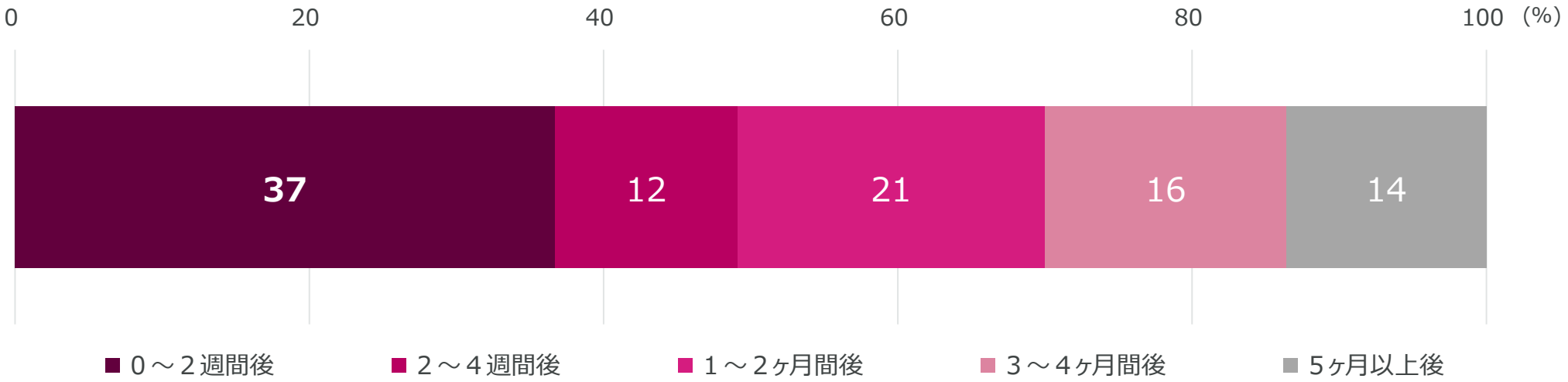
受診までの期間

- **異常が見つかったもしくは症状を感じてから、婦人科を受診するまでの期間は「0～2週間」が37%で最も多かったが、51%の患者さんは1カ月以上かかったと回答した。**

Q. 婦人科検診で何らかの異常が見つかったもしくは何らかの症状を感じてからどれくらいで婦人科に行きましたか。
（他の科に行った場合は最終的に婦人科に行くまでの期間をお答えください）

n=177

※受診のきっかけとして、「気になる症状があった」、「婦人科系疾患の経過観察中に異常が見つかった」「婦人科検診で異常が見つかった」方のみ回答

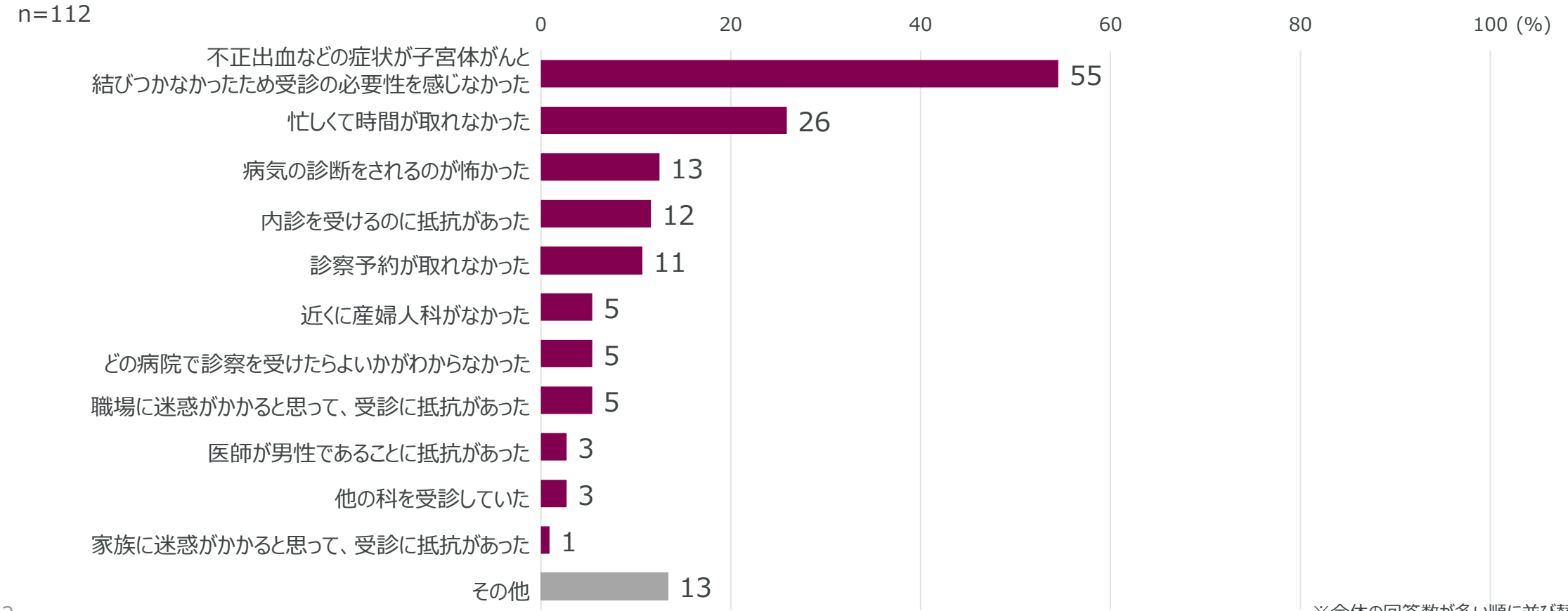


受診まで時間がかかった理由

- **異常が見つかったもしくは、症状を感じてから婦人科に受診するまでに半月以上の時間がかかった理由としては、「不正出血などの症状が子宮体がんと結びつかなかったため受診の必要性を感じなかった」の割合が55%で最も高く、次いで「忙しくて時間が取れなかった」の26%であった。**

Q. 異常が見つかったもしくは、症状を感じてから半月以上婦人科へ行かなかった理由について、当てはまるものを全てお教えください。（複数回答）

※異常が見つかったもしくは何らかの症状を感じてから婦人科受診までの期間が2週間以上の方のみ回答



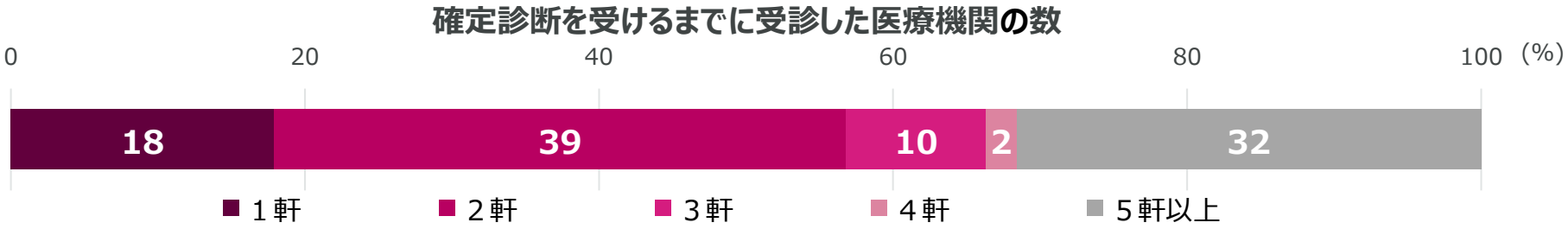
※全体の回答数が多い順に並び替え

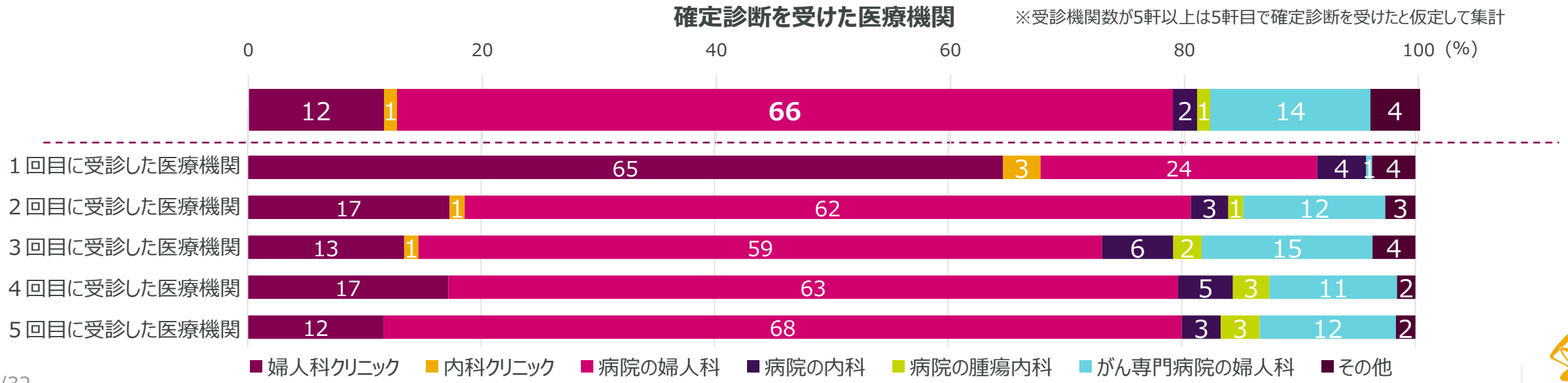
確定診断までの受診

- 子宮体がんの確定診断を受けるまでに2軒以上医療機関を受診した患者さんは82%おり、32%の患者さんは5軒以上受診したと回答した。
- 子宮体がんの確定診断を受けた医療機関として最も多かったのは「病院の婦人科」（66%）であり、受診した回数ごとに比較すると1回目は婦人科クリニックを受診した患者さんの割合が65%と最も高く、2回目以降は病院の婦人科の割合が最も高かった。

Q. 子宮体がんの確定診断がつくまで、どのような医療機関を受診しましたか。

n=190

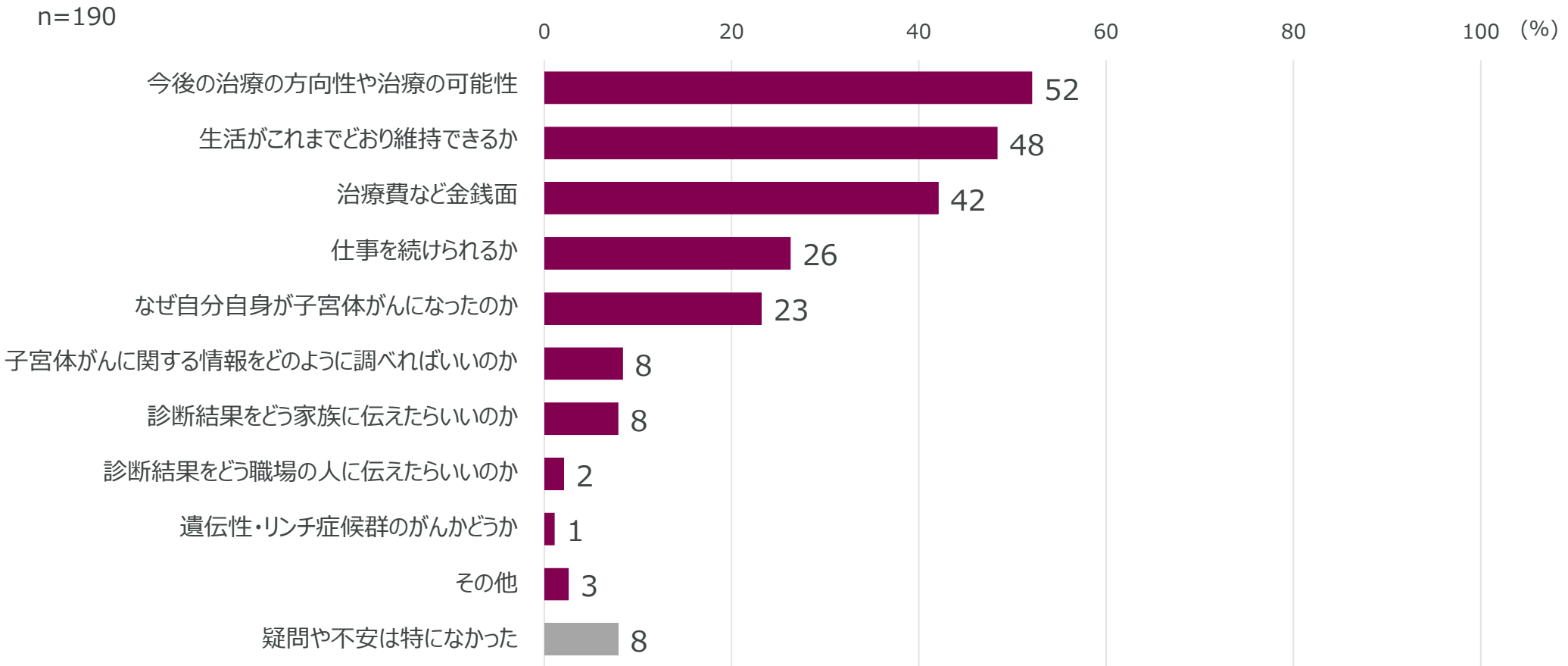




確定診断時の疑問や不安

- **確定診断時に疑問や不安は特になかったと回答した患者さんの割合は8%であり、疑問や不安として当てはまるものでは「今後の治療の方向性や治療の可能性」が52%で最も多く、次いで「生活がこれまでどおり維持できるか」の48%であった。**

Q. 確定診断時に疑問や不安は何かありましたか。当てはまるものをお教えください。（最大３つ）



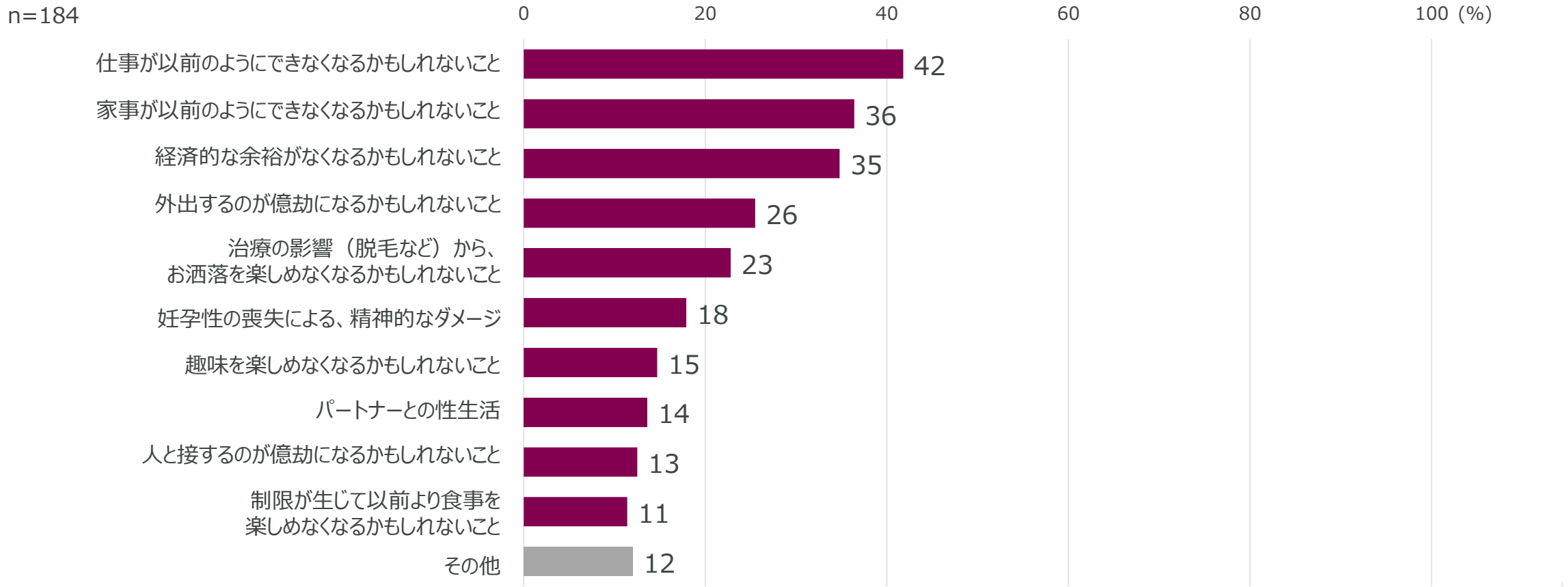
※全体の回答数が多い順に並び替え

手術後の生活における不安

手術後の生活での不安は「仕事が以前のようにできなくなるかもしれないこと」が42%で最も多く、次いで「家事が以前のようにできなくなるかもしれないこと」が36%であった。

Q. 手術後の生活でどのようなことに不安をもたれていましたか。当てはまるものをお教えください。（複数回答）

※現在または過去に子宮体がん治療で手術を受けた方のみ回答



※全体の回答数が多い順に並び替え

本調査結果③

日常生活への影響と
子宮体がんに関する知識

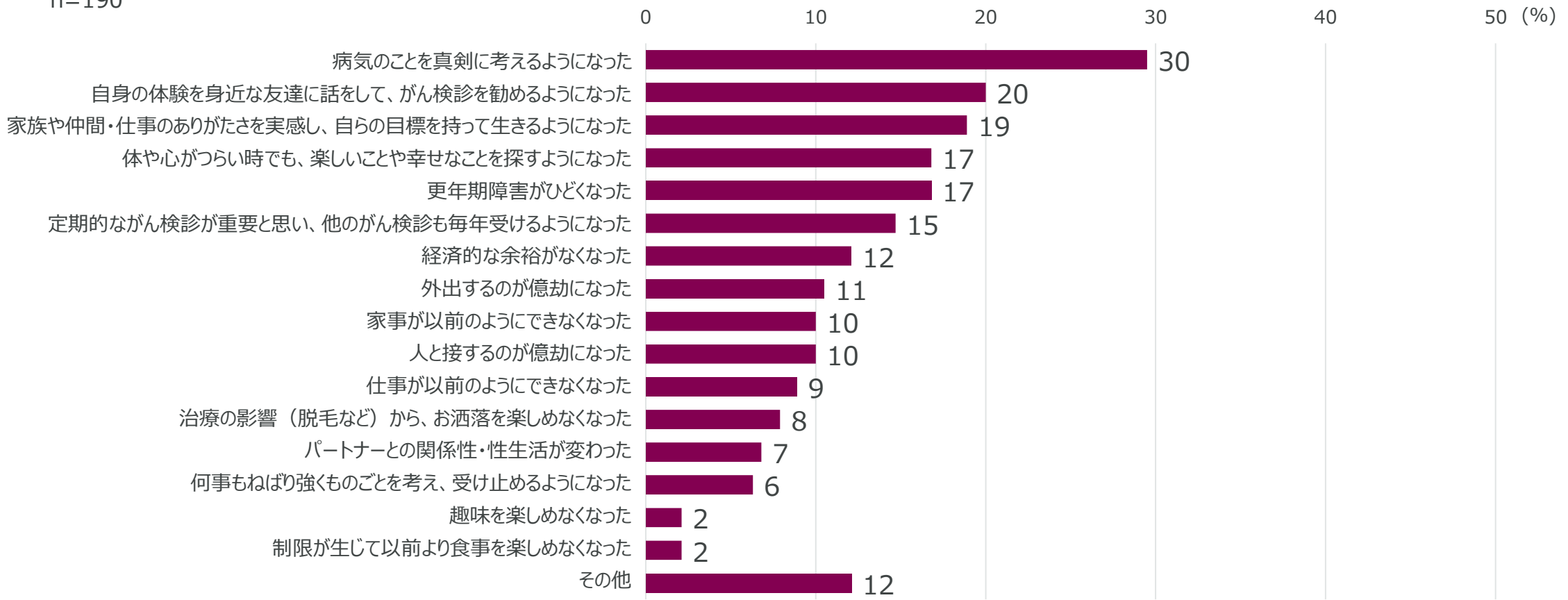
がん罹患後の日常生活上の変化

- **がんになって生じた日常生活上の変化では「病気のことを真剣に考えるようになった」の割合が30%で最も高く、次いで「自身の体験を身近な友達に話をして、がん検診*を勧めるようになった」の20%であった。**

＊子宮体がん検診は、国の指針で定められているわけではないため、原則自治体では実施されていません

Q. がんになって、日常生活上どのようなことに変化がありましたか？あてはまるものお教えください。（最大3つ）

n=190

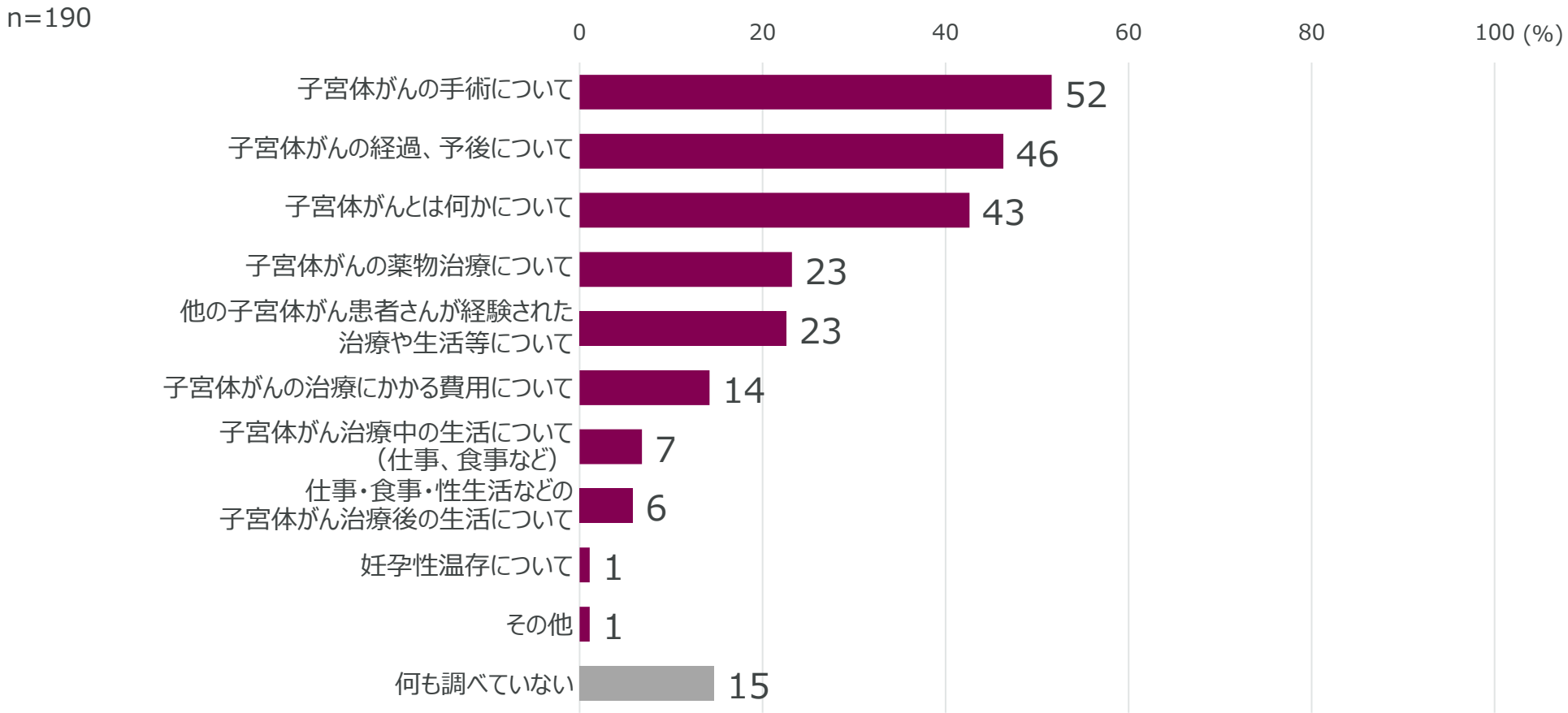


※全体の回答数が多い順に並び替え

診断後の情報収集

- **診断後に子宮体がんに関して調べたことでは、「子宮体がんの手術について」の割合が52%で最も高く、次いで「子宮体がんの経過、予後について」の46%であった。**

Q. 子宮体がんと診断されてから、子宮体がんに関して何か調べられましたか。あてはまるものをお教えください。（最大3つ）

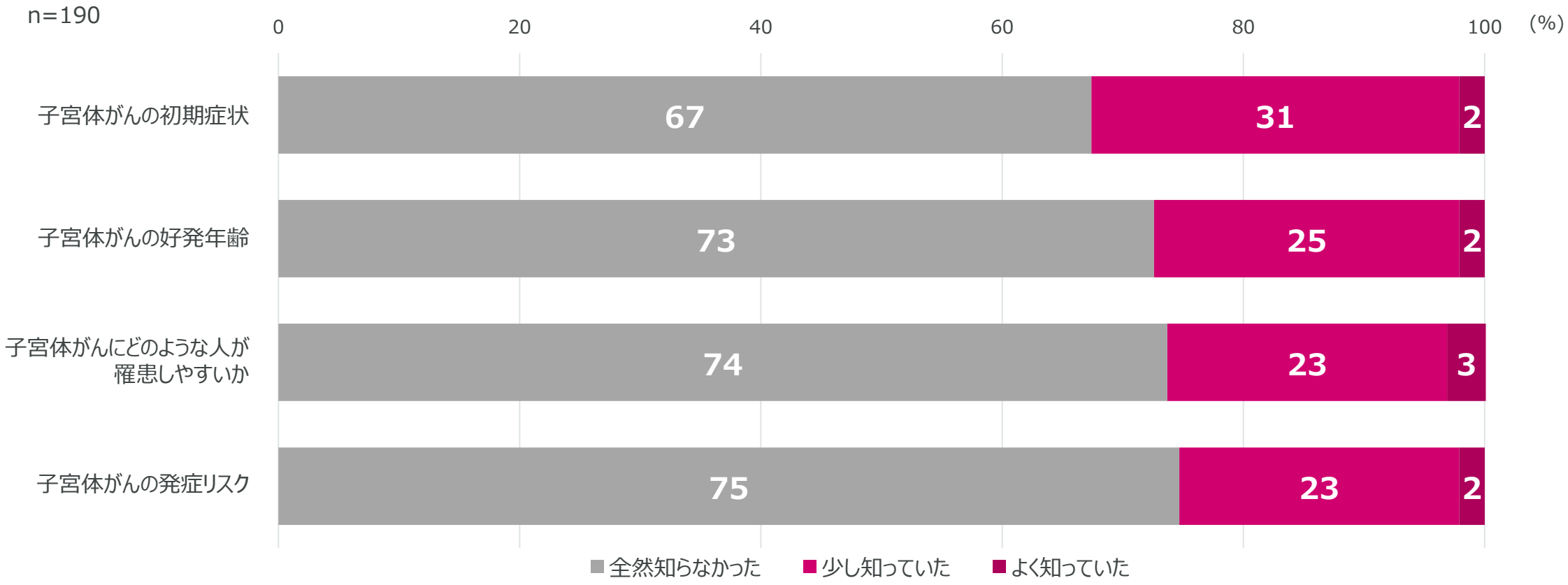


※全体の回答数が多い順に並び替え

診断前の子宮体がんへの理解

- **診断前に子宮体がんについてどの程度知っていたかを伺ったところ、「全然知らなかった」と回答した方の割合は 、初期症状（67%）、好発年齢（73%）、罹患しやすい人（74%）、発症リスク（75%）だった。**

Q. あなたご自身は、子宮体がんと診断される前にどの程度子宮体がんのことをご存知でしたか。

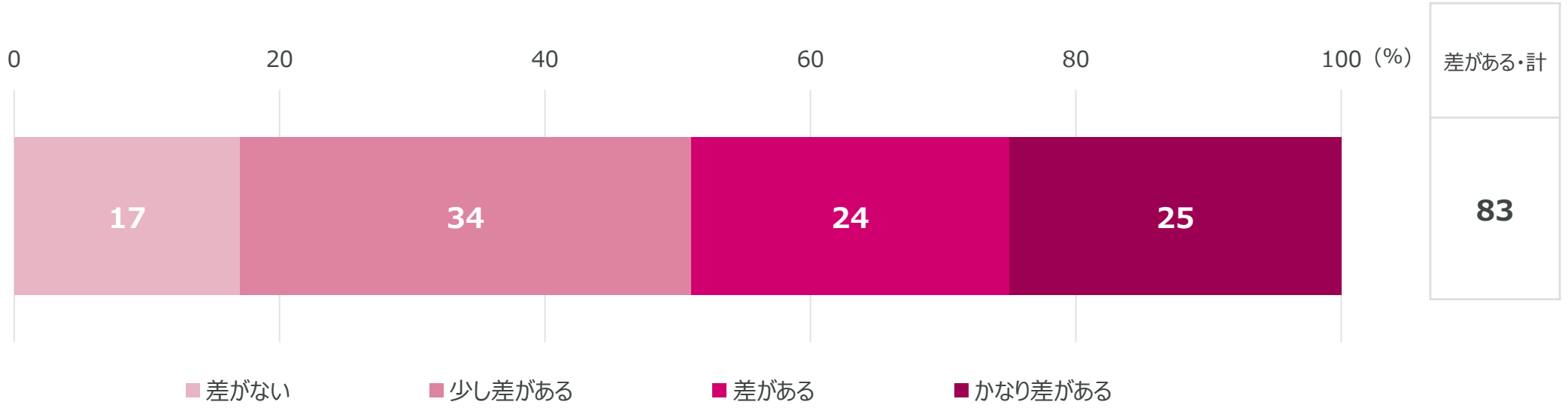


診断前と現在の知識量の差

- **診断前後で子宮体がんに関する知識量に差があると回答した割合は83%だった（「少し差がある」「差がある」「かなり差がある」の計）。**

Q. 子宮体がんと診断される前と現在ではご自身の子宮体がんに関する知識の量にどの程度差がありますか。

n=190



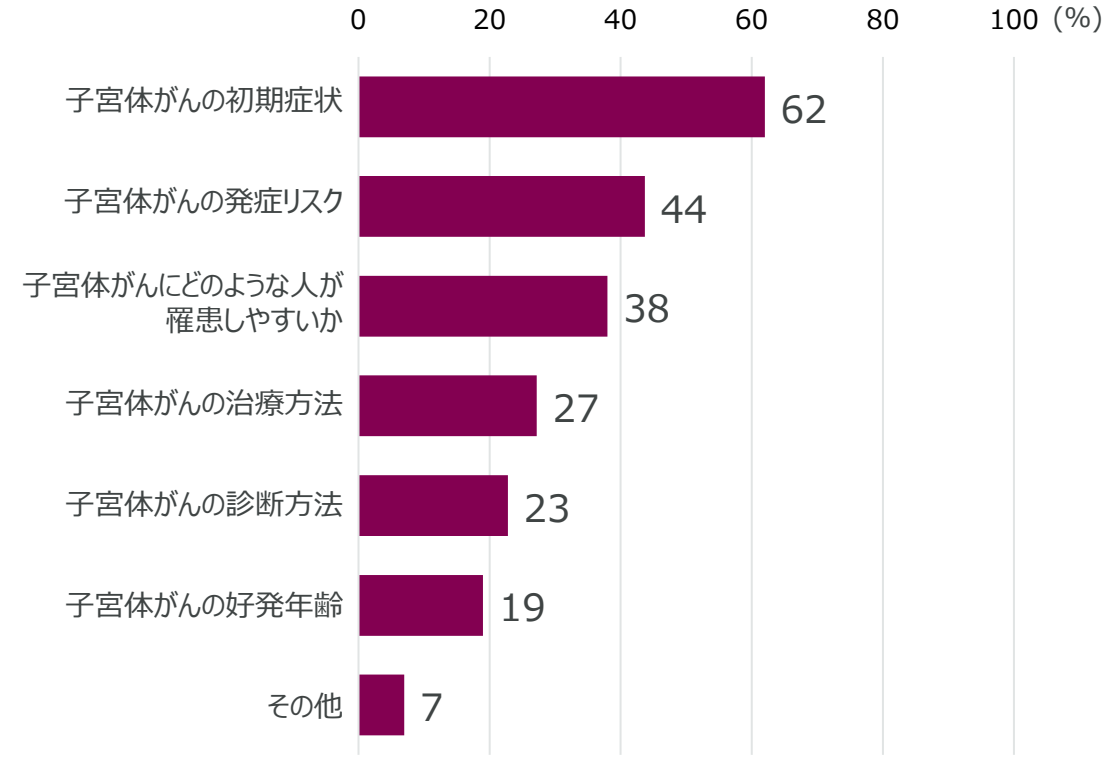
診断前に知っていたら良かったと思う知識

- **診断前に知っていたら良かったと思う知識は「子宮体がんの初期症状」の割合が62%で最も高かった。**
- **診断前により多くの知識を持っていたとしたら、どんなことにつながると思うかでは、「もっと早い受診につながる」の割合が61%で最も高かった。**

Q. 子宮体がんと診断前に知っていたら良かったと思う知識は何ですか。
（複数回答）

n=158

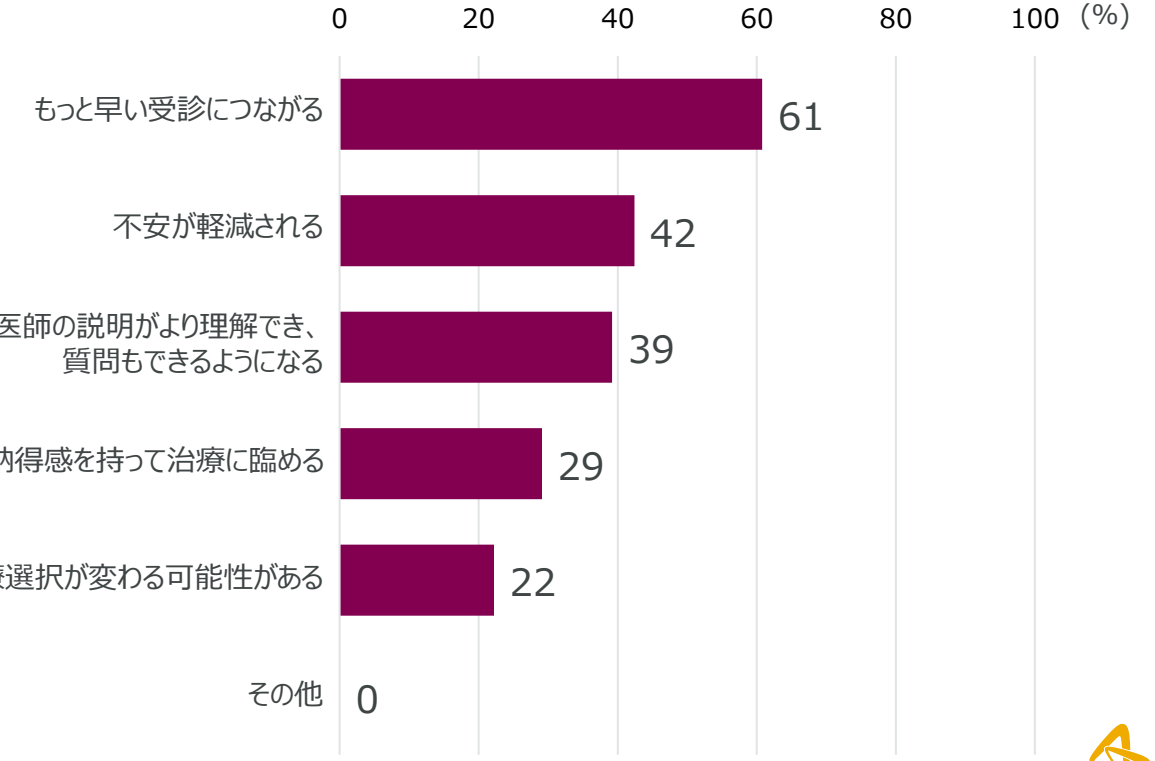
※診断前と現在で知識量に「少し差がある」「差がある」「かなり差がある」方のみ回答



Q. 診断前により多くの知識をもっていたとしたら、どんなことにつながると思いますか。
（複数回答）

n=158

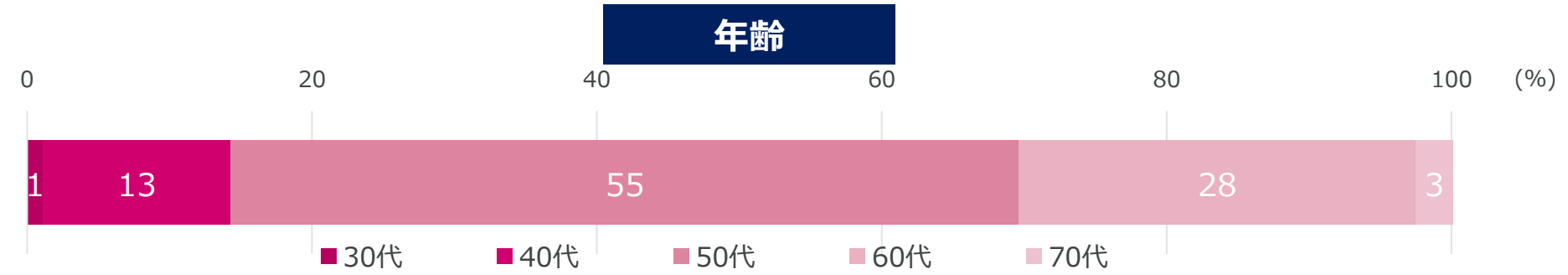
※診断前と現在で知識量に「少し差がある」「差がある」「かなり差がある」方のみ回答



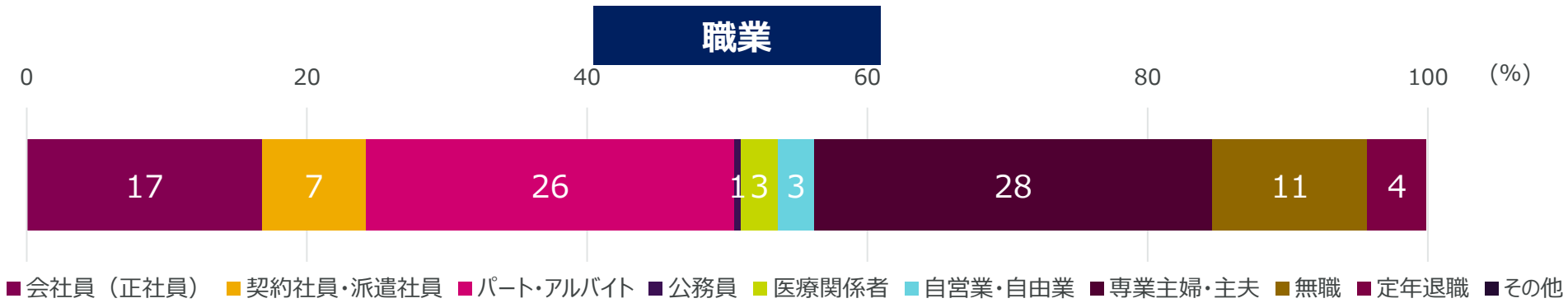
回答者プロフィール

年齢、職業、出産経験

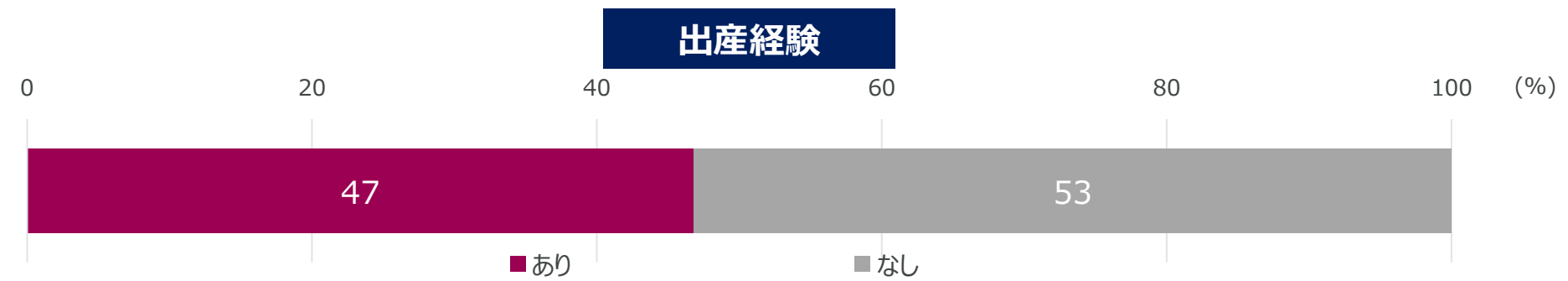
n=190



n=190

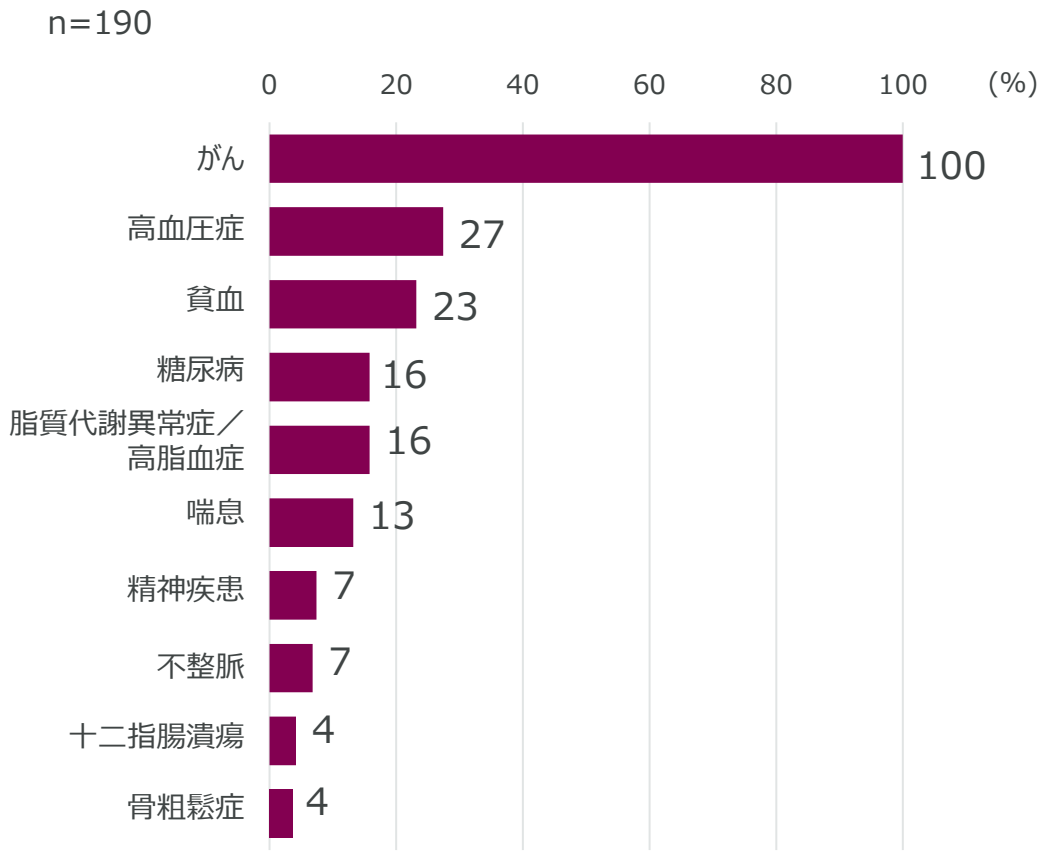


n=190

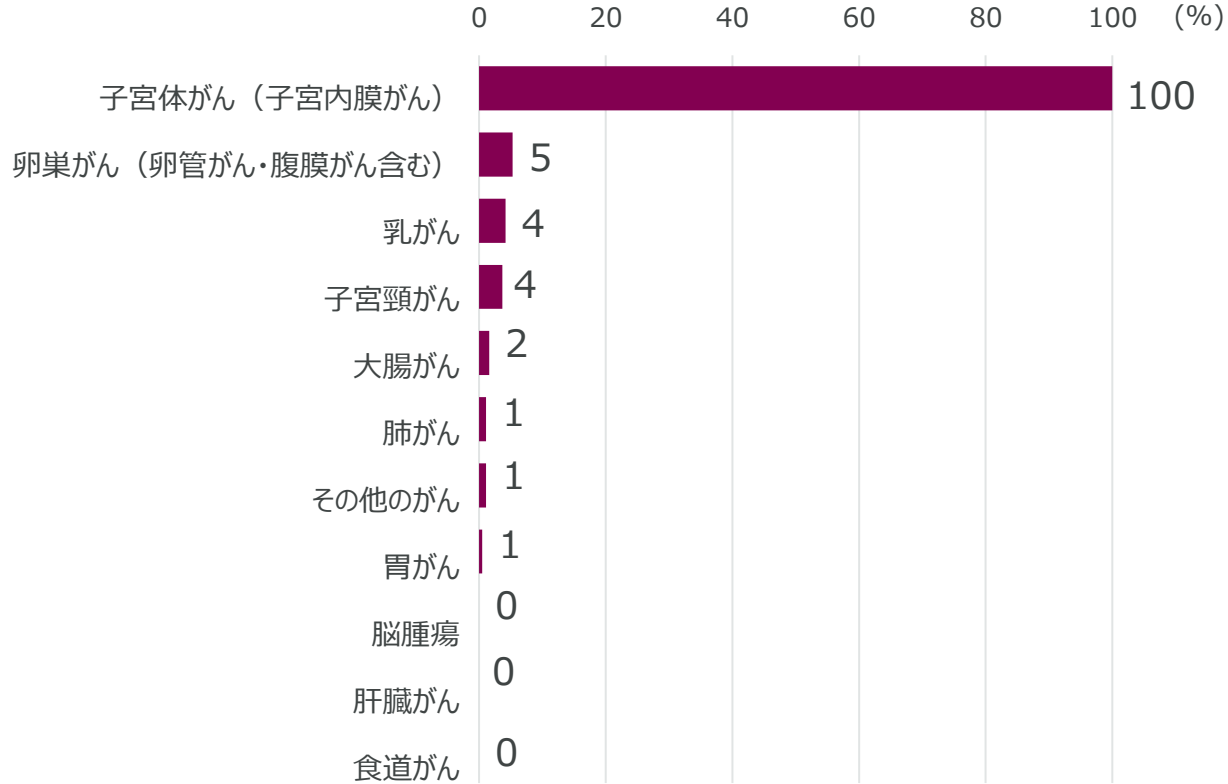


既往歴・がん種

これまでに経験した病気（複数回答）



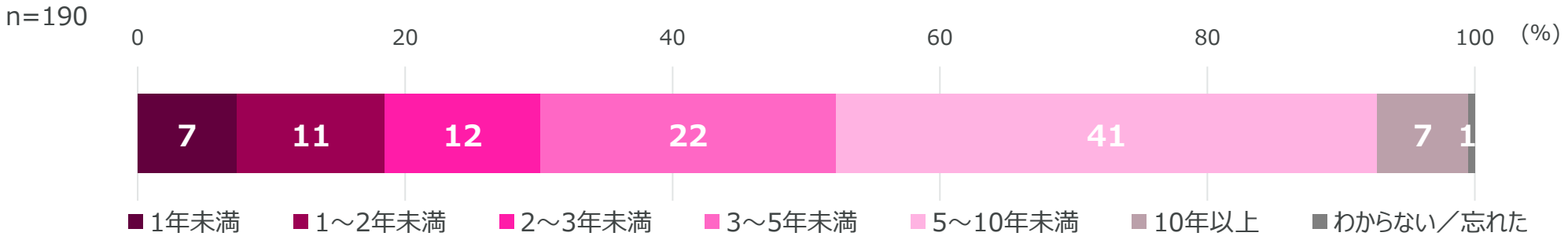
これまでに診断されたがん種（複数回答）



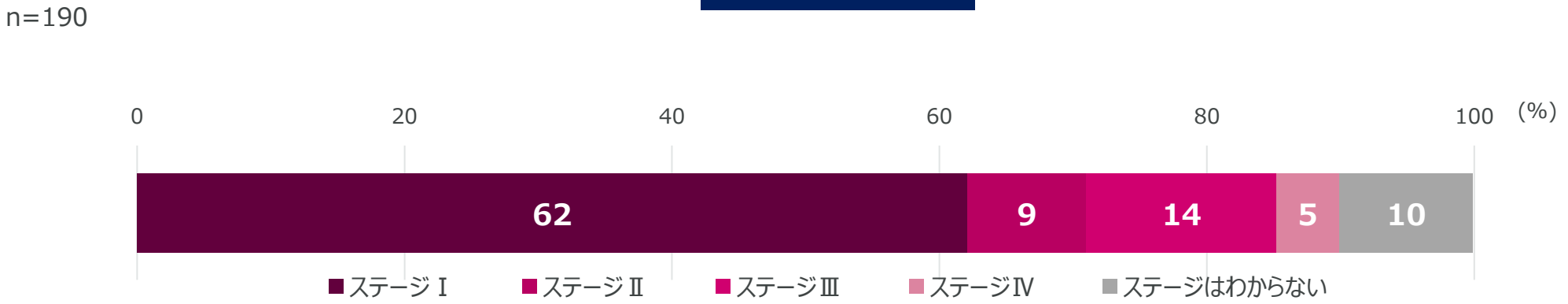
※全体の回答数が多い順に並び替え

診断時期・ステージ

診断時期

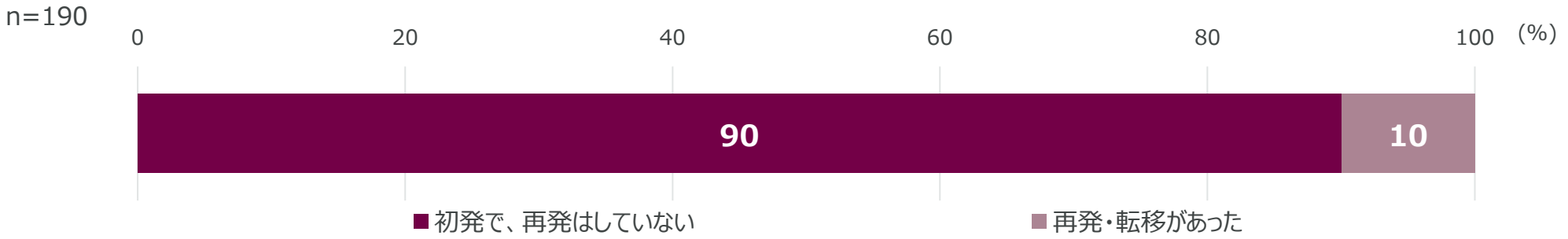


診断時のステージ

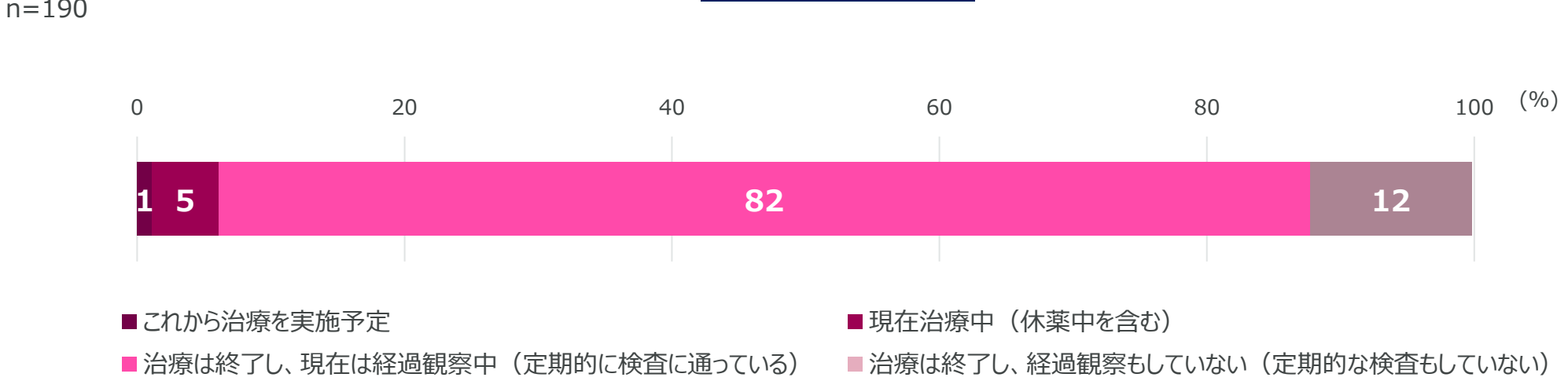


診断時期・ステージ

再発・転移の有無



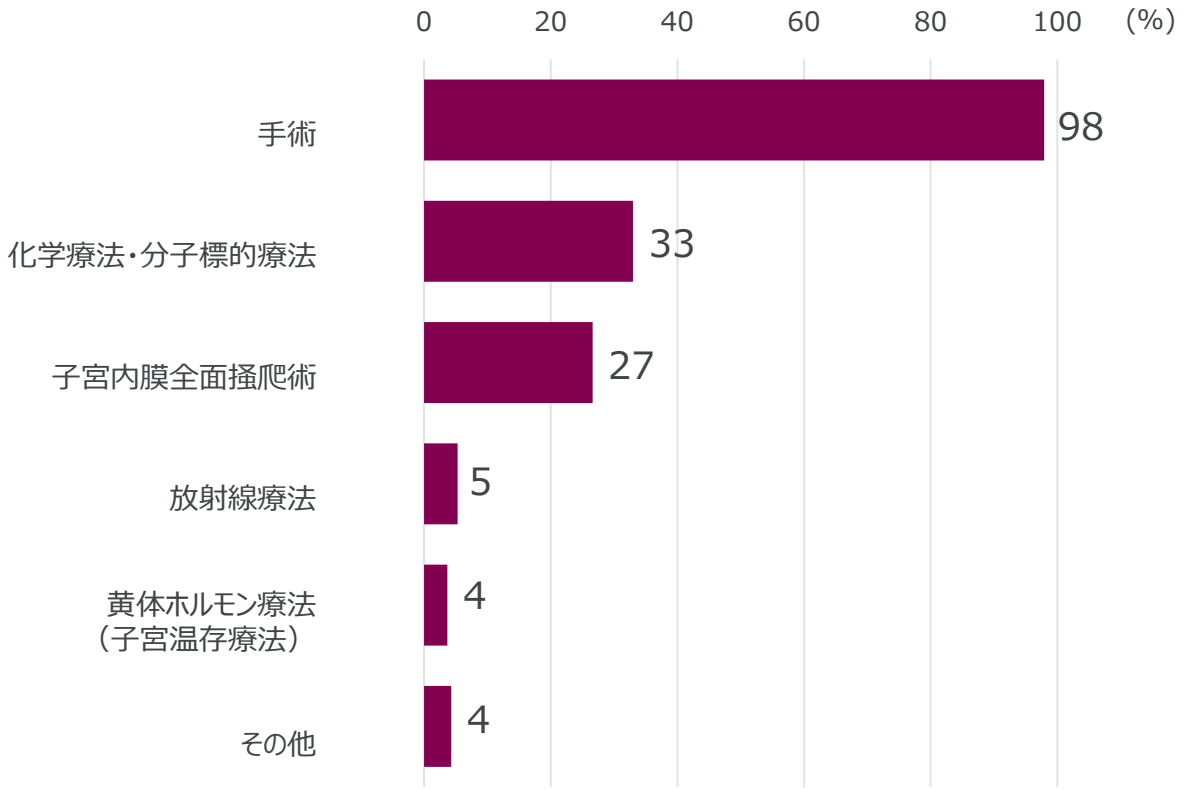
治療状況



治療内容

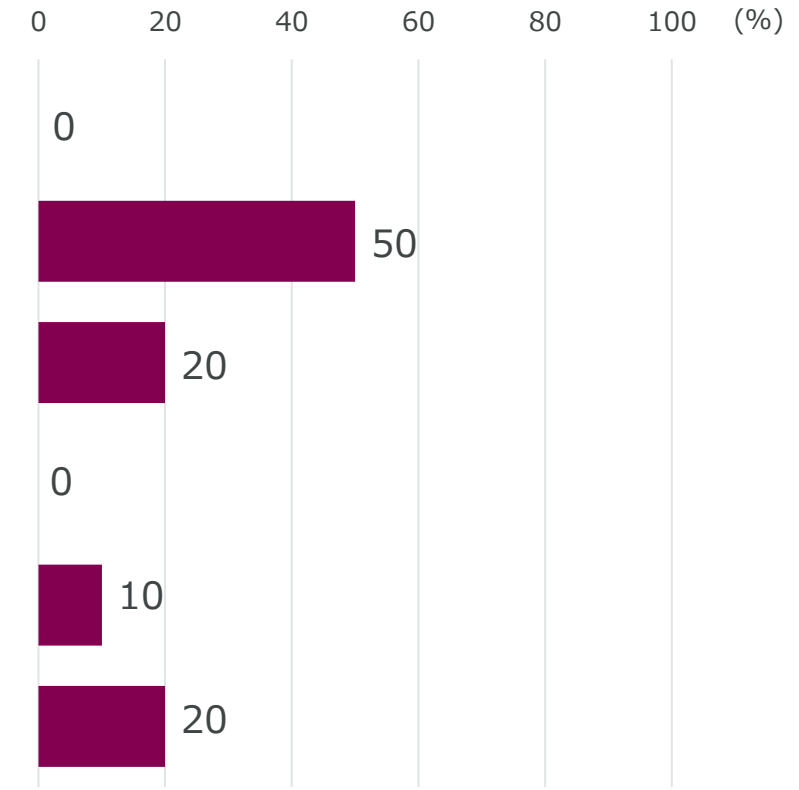
過去に実施したことがある治療（複数回答）

n=188



現在実施している治療（複数回答）

n=10*



※過去に実施したことがある治療の回答数が多い順に並び替え
※n<30の箇所(*)は参考値